

前回までの振り返り

- 現行の分離型でも小中学校間の交流があり、児童生徒や教員同士の関係性はできてはいるが、先生と保護者間の交流は少なく、施設一体型の方がお互い面識ができて良い。ただ、一体型でなくとも、小中一貫教育の中で保護者も含めた交流ができれば違うのではないか。
- 分離型及び施設一体型それぞれのメリットとデメリットを考える必要がある。通学距離が延びたり、ランニングコストの課題などもある。5地区それぞれの特性を生かした良い教育の形ができればと思う。(第3回)
- 小学校と中学校が離れていると、時間の制約もあり、実際に子どもたちが学校間を行き来するのは難しく思うような取組ができない。今後は施設一体型として直接的な交流を中心に考えても良いのではないか。
- 施設分離型の義務教育学校の場合、校長が一人となり、各学校において、最終判断を行う校長が不在となる時間が多くなり、不可能ではないが漠然とした不安はある。
- 保護者の視点から、義務教育学校になることで、前期課程（小学校相当）と後期課程（中学校相当）の先生を知ることができ、より安心できる。
- 小規模の環境よりは学校規模を大きくして、多くの先生に指導してもらった方が良い。
- 義務教育学校については、施設一体型の方がイメージしやすい。一体型として、学校全体の体制が把握できるような安心感を持てる形態の方が良いのではないか。
- 小中一貫教育を行う上では、学校間の距離が近いにこしたことはない。現在分離型となっているところについて、今後校舎を新築するという話になるのであれば、義務教育学校という形としていくのもありだと思う。
- 義務教育学校のメリットは縦の連携や人間関係が構築されることであり、それに伴い横の連携に係るデメリットをカバーできるのではないか。
- 義務教育学校のメリットとして、校長が1人であっても、その分のマンパワーが別に確保できるというのは大きいと思う。
- 西部地区は義務教育学校化することで地域の特色が出るのではないか。(第3回)